

平成 22 年 5 月 6 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19720096

研究課題名 (和文) 共感覚的比喩の「一方向性仮説」に関する研究

研究課題名 (英文) An Examination of the "One direction" tendency in Synesthesia Metaphor

研究代表者

武藤 彩加 (MUTO AYAKA)

国立大学法人 琉球大学・留学生センター・講師

研究者番号：00412809

研究代表者の専門分野：認知言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：共感覚的比喩、一方向性仮説、言語普遍性、身体性、五感

1. 研究計画の概要

この研究は、言語普遍性の現象のひとつとされる「共感覚的比喩」の「一方向性仮説」について、主な言語を対象に調査を行うものである。なおこれまで英語と日本語以外の言語について十分に調査は行われていない。

本研究では「各言語の共感覚的比喩体系には、様々な多様性が認められる」という仮説を立てて検証する。本研究は人間の生理学的普遍と文化等によって異なる経験的基盤との兼ね合いに関する考察であることから、言葉の意味に関する重要なテーマの一部を担うものである。

2. 研究の進捗状況

(1) 2007 年度～2009 年度の 3 年間で、中国語、英語、タイ語、ドイツ語、タガログ語、韓国語、フランス語、ロシア語、アラビア語、マレー語、スペイン語、ベンガル語、ポルトガル語および日本語の計 14 言語における「視覚→他の感覚」(一方向性仮説に反する例) および「触覚→他の感覚」(一方向性仮説に従う例) について調査を行った。14 言語全体における触覚表現と視覚表現の割合について、すべての被験者がすべての転用例を「言える」と判断した場合を 100%とすると、触覚表現は 38%、視覚表現は 17%の例が自然であると認められた。このうち、「視覚」表現のなかの「視覚→聴覚」を除く例が一方向性仮説に反する例であり、平均 11.3%の例が自然であると認定された。以上、この調査結果全体を振り返ると、転用の傾向としては「視覚表現」に比べ「触覚表現」の方が多く存在するといえるが、視覚表現からの転用も各言語に一定数存在することがわかった。また、これ

ら「視覚」表現のうち「視覚→聴覚」を除く一方向性仮説に反する例に注目すると、例えば「視覚→触覚」表現は英語において多くの反例が存在し(38%)、中国語やアラビア語にも一定数の用例が存在する(ともに 17%)。また「視覚→味覚」表現はやはり英語が最も多く(33%)、次いで中国語(22%)、日本語、スペイン語、韓国語に一定数の用例が存在する(19-15%)。「視覚→嗅覚」へは最も多く用例が認められ、やはり英語に目立って多く認められたほか(42%)、日本語(24%)、スペイン語(18%)と続き、中国語、アラビア語、ドイツ語はともに 15%という結果を得た。

(2) これまでの調査で得たデータを裏付けるため、次に挙げる言語については海外へ赴き、インフォーマントの数を約 60 人に増やし更なる調査を行った。

- ・英語、およびフランス語(2008 年度)
- ・スウェーデン語(2009 年度)

なおこれら三つの言語については、視覚と触覚からの転用のみならず、他の感覚(味覚、嗅覚、聴覚)からの転用例についても併せて調査した。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

(理由)

当初に挙げた計画は、主な言語 20 における一方向性仮説について調査するというものであった。現在までのところ 15 の言語については調査済みであり残り 5 言語を残すのみとなったが、当初に計画していなかった次の 2 点

についても併せて調査が進んでいる。

・60名を対象とした調査を行いしかるべき数のインフォーマントを得たことで、データの信憑性をより高めることが出来た（英語、フランス語、スウェーデン語）。

・韓国語、タイ語、スウェーデン語については、「味を表す言葉」の収集についても調査を始めておりデータをまとめている。これは本研究の主旨である「人間の生理学的普遍と文化等によって異なる経験的基盤との兼ね合いに関する考察」に直接関わるものであり、本研究が今後も更に広がっていく可能性を示すものである。

4. 今後の研究の推進方策

残り5言語に関する調査を滞りなく実行する。さらに「味を表す言葉」に関する調査についても調査を進め、日本語を含めたアジアの言語の結果と、今後予定されているヨーロッパの言語との結果を照らし合わせ、言語普遍性をめぐる考察をいっそう深めたいと考えている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① Ayaka MUTO (2010) An Examination of Synesthesia Metaphor in English and French, *the 2010 Seoul International Conference on Linguistics*, Conference Papers (Refereed by Full Paper), (掲載予定). 査読有

② 武藤彩加、副島健作、山元淑乃「共感的比喩の『視覚』表現—ロシア語とフランス語を中心に」, KLS 29 (Proceedings of Kansai Linguistic Society) (掲載予定). 査読有

③ 武藤彩加「9つの言語における『共感的比喩』—「触覚を表す語」と「視覚を表す語」を中心に」, 『日本認知言語学会論文集』第9巻, 日本認知言語学会、2009年月. 181-190頁. 査読有

④ 武藤彩加「『共感的比喩』の一方向性仮説における反例の検証と課題—7つの言語を対象とした『視覚を表す語』に関する予備調査の結果から」, 『留学生教育』第5号, 琉球大学留学生センター, 2008年3月, 1-18頁. 査読有

[学会発表] (計3件)

① 武藤彩加、副島健作、山元淑乃「共感的比喩の『視覚』表現—ロシア語とフランス語を中心に」, 関西言語学会第34回大会, (2009年6月6日), 於神戸松蔭女子学院大学.

② 武藤彩加「9つの言語における『共感的比喩』—「触覚を表す語」と「視覚を表す語」を中心に」日本認知言語学会 第9回全国大会, (2008年9月14日), 於名古屋大学.

③ 武藤彩加「『共感的比喩』の一方向性仮説」における反例の検証と課題—7つの言語を対象とした「視覚を表す語」に関する予備調査の結果から」, 第3回 沖縄県日本語教育研究会 (2007年3月8日), 於琉球大学留学生センター.

[図書] (計1件)

大橋正房、山本真人、武藤彩加他著 (2010) 『「おいしい」感覚と言葉 食感の世代』, 株式会社 B/M/FT 出版部. («オノマトペと共感覚」(「おいしい」の言語と文化(pp. 66-69) 担当 (インタビュー記事), 総頁数 159 頁).